



シッド・ヴァレリー 往復書簡

二宮正之訳

筑摩書房

ジッド・ヴァレリー往復書簡 1 1890-1896

1986年8月30日初版第1刷発行

訳者 二宮正之

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2-8

電話 東京 291-7651 (営業)

294-6711 (編集)

郵便番号 101-91

振替 東京 6-4123

印刷 株式会社精興社

製本 株式会社鈴木製本所

ISBN 4-480-83082-0 C0098

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛  
送料小社負担にてお取替いたします。

## 序文

ロペール・マレ

一九五〇年のこと、アンドレ・ジッドが《ヴァレリーのくれた手紙をもう一度読んでみたい》と言った。それで、二百通をこえる手紙と死の床でのヴァレリーの写真との入れてあった大きな箱を探し出してくるように、と私に言った。ジッドは、写真を長い間じっと眺め、落ちついた深刻な調子で説明を加えるのだった。あの《美しい顔》、《知性が嘗て何回となく挑発した沈黙の内に、壁に閉ざされたように閉じ込められてしまったけれども》、なお透けてみえていたというあの顔のことを語ってくれた。更にジッドは、友人の模範的な死、心穏やかな礼儀正しい死を喚起して、それに続いた盛大な葬儀は「ヴァレリーも拒みはしなかったに違いないけれども、まあ、おかしそうな顔をしたことだろう」と言った。その時ジッドは、ちょうどヴァレリーと同じように、自分の埋葬に関しては何一つ予見したくないと思っていることをほめかした。ジッドが世を去ったのは、その一年後であるが、ジッドもまた末期というものの最も理性的な模範を示してくれた。この一九五〇年に、ジッドはしばしばこんな風に言っていた。もう人生の終りに近いような気がするが、けっこうなことだと思わずにはいられない、立派に死ぬことの方が立派に年をとるのより易しいように思われるから、と。その日、ヴァレリーの手紙が読み返したくなったといった時のジッドは、身のこなしが生き生きとしており、精神の動きも活潑で、驚くほど若々しい老人という感じであった。私のそばに坐り、鼈甲の大きい眼鏡をきちんとかけなおし、ヴァレリーから受け取った最初の頃の書簡、一八九〇年から一八九一年にかけてのものを走り読みしはじめた。読み進むうちに、《何とこの文体だろう！》、《早熟だねえ！》、《頭がいいこと！》などと感嘆の言葉がいくつもとび出してくるのだった。二時間ほどしてジッドは言った。《どうみても、この手紙は出版すべきではないかな》。

——《先生のお手紙と一結にですか》。

——《そう。どうもあまり嬉しくはないがね。自分の手紙の内容は覚えていないけれども、ヴァレリーの横に出たら、僕はすいぶん精彩を欠いて影が薄いにきまっているからね。ヴァレリーよりも口数が少なかつたこともたしかだし。》

——《先生は、いつでも、文通の相手よりも短い手紙をお書きになりましたからね。》

——《そりゃそうさ。ぼくは友情を仕事にしていたんだ。これはなかなか骨の折れる仕事でね。絶えず面倒をみる必要がある。それでぼくは消耗していたんだ。一人一人には少しずつでも、大勢に宛てて書いていたんでね。》

——《それで償われるとお考えですか。》

——《いや、絶対に駄目だ。一人一人が皆、自分の権利を侵害されたと思うからね。ところが、僕が侵害していたのは先ず自分自身だったんだ。ヴァレリーとの場合、手紙の長さの相違が一番困ることではない。調子が非常に異なるんでね、その方がもっと弱る。ヴァレリーは手紙を書くのが実にうまかつたからねえ。まあ、ぼくとしてもそれになう返事を書くことと思えば書けたかもしれない。ただ事実は厳然としてある。こちらは何とも精彩のない返答をしたもんだよ。それでもやはり観念してぼくの手紙も出すべきだろうね。ぼくらの書簡を出版する決心をすれば、それはヴァレリーのためであって、ぼくのためではないんだから。ヴァレリーが二十歳の時にぼくの前に現われたその姿で皆に知られる事、それがとても重要なんだ。ヴァレリーに対して下された評価の実に多くのものが修正すべきだということになるだろうね。》

—— アンドレ・ジッドはその出版の企画を私にまかせてくれた。それで私は数週間にわたってジッドの家に通い、手紙の順序確定につとめ、熱心に解説を行なった。非常にしばしばジッドは私の傍に腰をおろし、手紙の日付を確かめる手伝いをしてくれたり、あれこれの言葉の意味を精確に説明してくれたり、特に自分が高く評価するくだりを声を出して読んで楽しんでらした。

——《こんなにはっきりと本能の印を押された散文を他に知っていますか。ヴァレリーは文章を推敲することを常に説いていたけれども、彼自身はそんなものではなくてもよかつたんだなあ。彼が書きつけるとすぐに、いやもう、見つけた瞬間からと言ってもよいくらいだけけれど、ヴァレリーの書く言葉は推敲されていたんだ。》

私の仕事は、ジッドが病気にたおれ中断された。私が再びヴァノー街に行ったのは、まだ知性の面をつけてはいたけれどもすでにヴァレリーのそれに沈黙の石となって合わりつつある顔に挨拶をするためであった。

ヴァレリーの手紙は再び箱に収められていた。数日後にそれは封印された。封印解除の手続きがすむまで数週間待たな

ければならなかった。仕事を続けるためにアンドレ・ジッドの書齋に再び行ったとき、私は、不可欠の援助を失い、あまりに深い秘密をかかえてしまった師と格闘することになり、自分自身につきもどされていくという胸をしめつけられる思いがした。こうして私は、解説者のうちでもっとも確かな人の代役をつとめなければならぬことになり、できるだけ上首尾にそれに成功するために、自分の記憶に呼びかけ、好運にも直接に知ることできたこの二人の人物を代る呼び起こしたのであった。友情をこめて心を打ちあけてくれた高齢のジッドの姿に応えるヴァレリーのイメージは、五十歳くらいのもので、息子の一人の友人に父親のような心づかいをしてくれた姿であった。

私は微笑をたたえたひとりの《紳士》を思い浮かべるのだった。こちらは質問一つする勇気がなくかしまっていたが、相手は私のいろいろな好みについて好んで聞きただすのであった。ポール・ヴァレリーは私にとって神秘にみちた偉大な人物であり続けた。その人物は一介の子供に関心を抱き、普通は親が押し殺そうとするような非常に自由な考えを、逆にその子供の心に引き起こすのであった。その偉大な人物が、二十年後に私の心によみがえり、彼の手紙の行間にその視線を再び感じとることによって、私はアンドレ・ジッドの存在との間に均衡を取りもどすことができたのであった。ジッドの手紙をヴァレリー夫人から渡してもらい、ようやく手に収めることができたとき、数多くの空隙が埋まり幾多の影が消え去った。手紙を交す二人の話は熱気と生気をとりもどし、あたかも両者に共通の沈黙の封印が、凡てぱっと解かれたかのようにであった。

\*

一八九〇年五月、モンペリエ大学の六百年祭に際し、パラヴァスで、当時二十歳のビエール・ルイスに、初めて、ポール・ヴァレリーが出会ったわけだが、その時、ヴァレリーは兵役の最中であつた。この地方青年は、自分より一歳年長のパリっ子の示す物腰の自由闊達さと文学についての教養とに、すぐに魅了された。ビエール・ルイスが当時パリに居た友人アンドレ・ジッドに出した手紙を見ると、好印象を得たのがヴァレリーの側だけではないことがわかる。「そこから、いくつもの深い友情が生まれたんだけれど、それに関しては相手の名前しか言えない。今日のところ、これが他のすべての友情に優先するんだ。ジュネーヴの二人の文芸家、ベラルとバルビエ、それからポール・ヴァレリー、これはモンペリエの坊やで、『誘惑』、ユイスマンス、ヴェルレーヌ、マラルメについて語ったんだが、その言葉づかいと言ったら……いいかい、こいつは君にすすめるよ。」そして数日後には、「一番興味をひくのはヴァレリーだ」と付け加え、さらにパリに

戻って来てからは、毒をふくんだ媚態を押し進めて、ジッドがあまりに友情に満ちた手紙をよこしたと言って非難し、不安に思っているジッドを故意に苦しめさせた。「あんなに良い手紙をよこすなんて、うらんでるぜ。ぼくの計画がすっかりこんがらがってしまっじゃないか。ぼくはヴァレリーを相手にたっぷりした内容豊かな文通を始めようとしていたんだ。そして君にはぶっきらぼうな端書を一枚出して、二人の友人を同時に研究する時間はないこと、今のところ君は脇にのけておくことを伝えようとしていたのさ。」ジッドはこの種の無駄な挑発に慣れていた。それが絶交の理由になるのはもっとずっと後のことだ。当時、アルザス学院のかつての級友であり、文学と自然科学との輝かしい学士であるピエール・ルイスは、ジッドに対してなかなか威信があり、それを好んで濫用していた。ルイスは自分がどんなに類いまれな友人を見つけたところかということを知って明言する楽しみを控えることができない。そうすることによってジッドに対する自分の友情の価値を低める形になるのだが、それでいて一方ではジッドを信頼している証しを与えもする。複雑さの点でルイスはジッドに少しも譲らないのである。新しい友情の存在を漏らす時に、多少の裏切りと多少の見せびらかしとをまじえ、この新事実を伝えるに際し、下心がなくはなかったとはいえ、まだ弱年のヴァレリーの精神の偉大さを他人に先がけて見ぬき、それをジッドに知らせてジッドにも知り合うことをすすめたのは、何といてもルイスの功績である。ルイスは一八九〇年十二月にヴァレリーにあてた手紙で、ジッドが父方の叔父で法学部教授であるシャルル・ジッドに迎えられるモンペリエに滞在するところである旨を伝えると同時に、自分の心の動揺をあらわに示している。

「ジッドがぼくについて言うことはどうか一言も信じないでください。貴君はぼくのことを彼よりもずっとよく知っているのですし、ことぼくのこととなると、彼が無能であることは周知の事実なのです。ジッドには、「……」ぼくの手紙も一切見せないでください。ぼくは友情をそれぞれべつにしておくのが好きなのです。でも、貴君が彼に会うことはとても嬉しく思っていますし、彼が貴君にとって僕に対してと同様に親しいものとなることを期待しています。」奥歯にものはさまったような言い方であることは事実であるが、お互いに知らぬままにしておけばおけたであろう二人の友の仲立ちをしたいという気も明らかに読みとれる。ルイスの役割はこの場合決定的に重要である。ルイスに紹介されなければ、ジッドはヴァレリーが存在することも知らないでモンペリエに滞在しただろうと思われるからである。

この一八九〇年の十二月、アンドレ・ジッドは家庭上の理由があってモンペリエに行くことにしたように思われるが、ピエール・ルイスの話に好奇心をそそられて、そちらでヴァレリーと知り合えるという気持から出発を急ぎ、普段は若者

との接触の欠けていたこの町に予定よりも長く滞在しようとしたことも考えうるのである。バリを離れる数日前に、ジッドは『日記』に次のように記す。「道德<sup>モラル</sup>。外見に心をわずらわさないこと。存在、それだけが重要である。」ジッドは二十歳。『アンドレ・ヴァルテールの手記』を執筆中で、他人がかくあれかしと欲した自分と己れがかくありたいと欲する自分との間のもつれにもつれた状態を通して、指針となる導きの糸を求めていた。当時、ヴァレリーは、兵役から解放されたばかりで、気のすすまぬままに法学の勉強をしており、巧みな詩人であると同時に、すでに自分の天賦の才に不信感をいだいていたが、彼もまた危機の真直中にあつた。文学のおもての装いと精神の諸々の内実との間で躊躇していたのだ。樂觀主義は彼の得意とするところではない。ヴァレリーは、十二月九日、ピエール・ルイスに宛てて次のように書いている。「そろそろジッドに希望と再生とについて語りに来てもらうべきときです。冬の時間は歩みが遅く陰鬱なのです」<sup>(2)</sup>と。

ジッドがヴァレリーと交した最初の言葉がどのようなものであつたか、それは知られていない。どちらも書きとめる労をとらなかつたのだ。ただ、ヴァレリーがのっけからジッドに心をとらえられたことは判っている。ヴァレリーはその事を激しい調子でピエール・ルイスに伝えており、ルイスにとってはあまり快くなかつたかと思われるくらいである。「親しい友、僕は貴兄の友人、アンドレ・ジッドにすっかり心を奪われうっとりとしています。何と甘美な類いまれな精神なのでしょう、美しい韻と純粋な觀念とに何と深く熱中しているのでしょう。〔……〕こういう友情をもっている貴兄が羨ましい。もし貴兄たちの傍に暮らしていて、こういった熱のこもつた会話を養われ、おお詩人たちよ、あなた方の内奥に燃える魔法の炎によって絶えず温められるならば、僕は厳しく聖人のように仕事をするでしょう。」さらに数日後には、ルイスとジッドの関係について、次のような極めてジッド流の考えを記す。「貴兄たちの友情は、愛情の原因がある種の相違にあるとする意見を確証するもののように思われます……」そしてジッドについて「これは若い人たちの内で最も感じのよい、最も夢の多い、最も秘められた形で音楽家の、最も愛情を惜しまぬ人です。〔……〕僕らは頻繁に短い時間を共に過ごしています。僕の愚かしい浪漫趣味と中世好みから、あの古い大聖堂のまわりをしばしばひきまわしたものです、その悲しみを帯びた神秘的な石が僕の魂に深く印を残したカテドラルをめぐって……僕らの言つたことは、ジッドから聞いて下さい。僕が仕事をすると称してやたらに煙草をふかしているむさくるしいがらくた部屋のこと、ジッドがお伝えするでしょう。ジッドなら、癖に沿って草が生えいかに鄙びた儼くさい穏やかなユルバン五世街と界限の晩鐘の鳴り響く夕べとを生き生きと喚起することができるでしょう……。こうして今、日暮れどきにこの手紙を書きおえようと



している僕の耳に、同じ鐘の音がメランコリーを帯びて聞こえてきます。」

一方、ジッドは、『地の糧』において、自分の知ったもつとも詩情に満ちた地を数え上げているが、そこでモンペリエをあげ、次のように書く。「モンペリエの植物園。〔……〕ぼくは思い出す。アムプロワーズと共に、ある夕べ、ちょうどアカデミヤの園にでもいるかのように、糸杉にぐるりと囲まれた古い墓に腰をおろしたことを。薔薇の花びらを噛みしめつつ、ぼくらはゆっくりと語りあった。ぼくらは、ある夜、見た。ル・ペイルーから、遙か遠くの海が月光を浴びて銀に輝くのを。ぼくらの回りでは町の上水を湛える池の滝が音を立てていた。白い羽毛が総のようについた黒鳥が静かな泉水で泳いでいた。」ここでジッドのいう《古い墓》とは、土地の伝説によると、一七三六年にフランスで死んだ英国の詩人ヤングの娘、ナルキッサのものだとされている。その記念碑に《ナルキッサの鎮魂のために》Narcissae Placidus manibus という銘が刻まれており、それをヴァレリーが後に『ナルシス』の銘句とするのである。

二人の青年による散策の描写は、同じ系列に属するロマン的な感傷主義を表わしている。こういう質の感動は、表面を走るかすかなおのきでは満足しない。デ・ゼサント流のはかないディレッタンティズムに影響を受けた、当時の若い《デカダン》の間で流行していたメランコリーが表面に表われているにもかかわらず、このような感動しやすい性質は、世界を他の人々の目を通しては受け入れたくないという共通の欲求につき動かされている二人の気質を、奥底まで揺り動かすのである。ピエール・ルイスのロマン主義は、こういう性質のものではない。それは、事物のメカニスムよりはその外見に心を配り、その意味作用よりは芸術的表現に引きつけられ、思索家というよりは夢想家の、若い審美家としてのロマン主義にとどまる。

ジッドはヴァレリーの内に自分に比肩しうる相手を見出した。ヴァレリーとなら、身の丈が同じで、真向から対決しうる二つの視線が同じ高さに位置するような気がするのだった。若者同士だと、友情は雷のように突然生起する。文学上の関心事をこえて、彼らは二人とも自分の心を占めている精神上の探求の深刻さを承知していた。しかしすでにジッドは相手のヴァレリーに対して、ヴァレリーがジッドに対するのよりも、自信を欠いていたようである。このモンペリエ滞在の六十年後に、ジッドは新しい友人に迎え入れられた本でいっばいの狭い寝室の壁に掛けてあったモットーを喚起するだろう。それは「絶えず己れを疑ってかかるべし」という言葉である。ジッドは、それを面白く思うよりも、このような忠言が大っぴらに示してあることに不安を覚えた。己れを疑う必要性は理解できるのだが、それは自己を強制して考えを深め

ることによってであった。彼の自然の傾向は、己れに到来するものをすべて信用する決心をして、他人が無理強いしようとする制度を修正する方向に向いている。ジッドは、自分の世界を、引き算をすることによってよりは、断然、足し算によって削り上げるだろう。ヴァレリーは、逆に、拒否と引き算とを大いに活用することによって、自分の思想と生活とを構築するだろう。一方は両腕をひろげ、他方はかたく腕ぐみをするだろう。ジッドが抱擁するのは、疑いに反駁するどころか疑いと共に進みその動機とさえる信頼の結果としてである。ヴァレリーの握り合わされた手が最後につかんでいるものの密度は、不信による結晶である。

バリに戻ると、ジッドはどれほど自分がこの友情に懸念しているかを次のように打ちあける。「新しい愛情を前にしてぼくはひどく臆病でぎこちなくなってしまう、これで貴君宛書簡を四度目に書き直そうとしている有様。〔……〕貴君の好みに反するのではあるまいか、何かしら気に入らぬことをしてかしてしまうのではないか、とまるで小さい子供のよう<sup>(10)</sup>に恐ろしくてしかたがないのです。」そして十日後には繰り返して「自分の手紙で何かへまをしてしまうのが恐ろしくてしようがないのです」と言う。ジッドはまたヴァレリーが『アンドレ・ヴァルテールの手記』をどのように評価するかということも心配しており、それを一部送る決心をするのに数週間もかけるのである。その結果、ヴァレリーは次のような反省をするに到るが、そこでは心理家がジッドの感じやすい点に指でふれている。「貴兄のせいで悲しかった！ この点よく考えてみて下さい！ しかし悲しみの原因は僕自身でもあったのです。悲しい〔……〕——貴兄には本当には信用してもらえなかったのが悲しい。」

二人の友人の間で書簡は急テンポで相継ぐ。その頃の書簡には文学についての考えが溢れており、文体は意識的に誇張され気取ったもので、二人とも、マラルメの強い影響を示す言い回しをしている。すぐに、ジッドは要求の高いことをあらわす。「超敏感ないわば秘教のような合一に〔……〕それと同時に、自分の魂を底の底まで識り尽すという快い欲びも」<sup>(11)</sup> 求めるのだ。

真実の内に合体したいという気持から、ジッドは一八九一年に文通の相手に対して魂を余すところなく吐露するように求める。彼はヴァレリーの魂が「宗教的であること」<sup>(12)</sup>を感じているという。ヴァレリーの魂はたしかに宗教的であるが、それはジッドの洞察力の捉ええない形でそうなのである。それに、この場合、ジッドは他者に自分自身の感情を移入することによって余りに性急に診断を下すという誤りをおかしている。たぶん、ジッドは、ヴァレリーが数カ月前にピエー

ル・ルイスに宛てて送った宣言といった形の手紙の一節を知らなかったのだろう。「ポール・アムプロワーズ・ヴァレリーは、美をその教義の一つとし、『芸術』をその使徒のうち最もすばらしいものとするこの宗教を崇敬する。わけても自分流のカトリシスム、ややスペイン風で大いにワグナー色を帯びゴシック式のそれを崇敬してこまます。」アンドレ・ジッドの宗教性はプロテスタントのもので、カトリックの豪華と儀礼の一切とを嫌悪する。この儀式を重んずるところにまさに中世の精神の様々に結び合わされた豪華さが見られるのだが、改革派教会の人間として、ジッドはそのような精神を蒙昧と見なし、スペイン風の色彩もジッドの目にはゲルマン風のハレルヤ同様に度が過ぎるものとして映るのである。

復活祭に際し、ヴァレリーは自分の行った枝の主日のミサを描き出し、直接に審美を語らぬものの、とくに美の次元で深く心を動かされたことを示し、自分の信仰に疑問をいだかせている。一八九一年を通じて、ジッドは『日記』の内で絶えず宗教問題について自分の考えを記しており、まだプロテスタントの教えから自由になることができず、宗教を道徳から切りはなすことができないでいるが、この最後の点をヴァレリーは本能的になしとげてしまう。ヴァレリーの方がこのように安々と宗教と道徳を区別しうるのは、プロテスタントとカトリックの信仰の相違によって説明がつく。カトリックの教義は外形にきわめて重要な役割を与え、典礼の儀式を宗教的実践の本質とする鑄型で人の心を惹くところまでゆく。一方プロテスタントの教義は儀式性を最小限に減らし、各人に、自己の良心を個人的な信仰の場とし、孤独の内に神と対面することを求める。宗教は、プロテスタントにとって（それがあまり宗教心の強くない場合でも）、何よりもまず一道德なのだ。それに反し、懐疑的な性格のカトリック教徒にとって——これがヴァレリーのケースであるが——宗教は完全には道徳と合致しない傾向があるようだ。もちろん、このような解釈が可能なのは、カトリックの教義が誤って理解されている場合だけである。しかし、プロテスタントの教義では、基本的な徳を外形という欠陥の巻き添えにすることはほとんど不可能である。それに、ジッドはヴァレリーよりもはるかに宗教心が強い。生まれつきの傾向に教育の効果が加わったのである。ジッドは、たとえ無神論者の家庭にあつたとしても、全く宗教を忘れうるとは思えない。ところがヴァレリーの方は、もし別の両親に育てられたとすれば、いかなる宗教にも関心をいだかないか、あるいは単に社会・政治現象として興味を覚えるだけだったかもしれない。ジッドも決して形而上学者とは言えないが、ヴァレリーよりはその傾向が強かった。ジッドには聖なるものの感覚がある。ヴァレリーは、他の人々にその存在することを認めるものの、自分の内にその反響は感じないのだった。したがって、宗教の次元において、ジッドとヴァレリーとはもともとかなり異なっている。

たといえる。なぜなら、プロテスタントのジッドは自分の尺度に合った宗教を作り上げようとするのに、カトリックのヴァレリーの方はすでにいかなる宗教の衣も着用しようとせず、それ以上に新たな衣を試してみようとはしないからである。一八九〇年に書いた自伝的な文章において、ヴァレリーはその点をはっきり説明している。「純粹な信仰ですって！ それに関する彼の考えはこんなところですよ（何よりも率直なことを、しかも、何よりも、自分自身に対して率直であることを欲しているのだ）。仮定の内でも最も粗雑なのは、神が客観的に存在するなどと思うことだ……。さよう、神は存在する、悪魔と同様に我々の内に存在するんだ、と。我々が神にささげるべき崇敬の念とは——我々が我々自身を尊敬することであり、その意味は、我々の適性の方向に沿って我々の自力によってよりよきものを求める、ということだ。一言で言うなら、神とは我々各人の理想であり、悪魔大王とは我々をその理想から逸らそうとするものだ。」ジッドがまさに神性についてのヴァレリーの考えに到達するのは、何年間も躊躇し、浮き沈みし、右左に進路を変えた後のことである。二十歳のヴァレリーの書いた文章は、八十歳のジッド、『かくあれかし、あるいは賭はなされた』のジッドによって書かれた、と言ってもよいくらいである。

ヴァレリーにとって、賭は、宗教上の賭も文学上の賭も、すでに一八九一年には、ほなされていたのである。彼は自分の力線を発見し、一生涯それを守り通すだろう。前衛雑誌に当時のヴァレリーは文章を発表するが、それは断固とした確信があつてのことではない。彼が味わうことのできた唯一の文学上の真の歓びはマラルメに負うものである。ピエール・ルイスに勧められて、一八九〇年十月、ヴァレリーがマラルメに詩を送ったところ、マラルメは驚くほど温かい先見の明を持って答えたのであつた。ヴァレリーがマラルメの内に愛したのは、徹底的に無駄を切り捨ててゆく努力であり、沈黙との境界において振動を引き起こす言語表現の緊張であり、諦めと紙一重のところまで押し進められた完璧に対する情熱である。すでに一八九一年四月十五日、『ナルシス』を発表したのちのヴァレリーはジッドに次のように書く。「書物を聖なるものと考へる人に僕は与するのです。自分の存在をかけた唯一にして良きものである一書をなして、消え去る……。〔……〕僕の詩のことなど心配しないでください。そんなものは黙らせておきます。つまらぬ蠅のような羽音をたてて、僕らのゆるやかな逍遥をかきみだしたりはしないでしょ……。」一八九一年八月には「何物も存在しない。現存する美以上には、知性と文体以上には。」そして同年九月には「芸術を受け入れる方でも作り出す方でも、憤懣と嫌悪との種子しか見つからないんです」と書く。それに対してジッドは文学を考慮に入れ、作家という職を真剣にとらえている。自分

が書くのをやめる時は《学びとる》ためだ、と言ひ、《生産》を中断したことを自らに責める。一八九一年から一八九二年にかけてジッドは何回か生産という言葉を使うが、ヴァレリーはこの表現を唾棄する。この点に関する両者の傾向の相違は一八九二年三月にはっきりと表われる。「君も承知の通り、黙るために書いたり、あれこれの神話を繰返し言ったりするには及ばないのだ。」と言ひヴァレリーに対し、ジッドは「一生涯、本を書くことだけに専念すべきなのだろう。それ以外のことには實際いやになる!!」と反論する。

一八九二年という年はヴァレリーにとって決定的な年である。一八九一年に初めて恋の悩みを経験し、それをすぐさま試験にかえ、自己及び他の人々に関して深い洞察力を備え情念の畏の仮面を引き剥ぐが、その畏の機能するのを妨げることはなく、すでにこの世の善悪の空しさを肝に銘じており、そういう青年としてヴァレリーはあの有名な《ジェノヴァの夜》を経験するわけだが、この夜の重要性は誇張されてパスカルの聖籠の夜とくらべられさえした。しかし、この比較には無理がある。パスカルもヴァレリーも「明証」にとらえられたにしても、前者はそこに賛同する力を汲みとったのであり、後者は拒絶の力を見出したのだから。ヴァレリーの生きた一夜は象徴的な意味を帯びるが、本人がそれを認めるのはずっと後になって過去を回顧してのことである。当時は、ジッドに宛てて書いた手紙でも、ほのめかしてさえないのだ。それはともかく、ジェノヴァにおいて一八九二年の秋、雷雨の轟音と閃光とのうちに、ヴァレリーは、それまで浸り切つてはいたけれども実践には及ばなかった確信に、悟りを開いたと言つてもよいほどの衝撃を受けた。これは、それまで彼が宿していたものすべて、密かに培っていたものすべてが開花したということだ。稲妻が走るたびに殻に割れを生じ、光を放つと同時に災禍を引き起こす卵形の空になぞらえて、自分を閉じていた壁を打ち崩すことによつてのみ、ヴァレリーはそれを実現できたのである。その夜、ヴァレリーは、物を書くことの空しさと創造行為の無との明証に衝撃を受け、文学を一生の業とすることを諦める。自己に閉じこもることの危険は懐疑の念によつて何倍にもなるが、それをあえて引き受けつつヴァレリーは諦めるのである。

もしヴァレリーが三十歳ぐらいで死ぬ運命にあつたとするなら、ランボーの冒険にびつたり対応するものを残したことになるだろう。実際、青春時代の手紙をみると、ヴァレリーはしばしばランボーの激しさと反抗的冷笑とを示している。彼の作品としては、いくつかの詩と二篇の稲妻のような作品(『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法序説』と『テスト氏との夕べ』)、さらに何冊かの私的な覚え書、そして本書と同じような質の書簡集が残されたことだろう。ランボーがもっと

長生きをしたら、沈黙を守り得たであろうか。口を閉ざすという決意にとって死以上によい支えはない。しかし、ヴァレリーが放棄することを放棄したのは、彼にとって自分自身を否定する一方法ではない。それは自分が放棄することを確認する一方法なのだ。何となれば、二十五年後に彼が再び表面に出現して以来の全作品は、妥協のない明晰さ、幻影のない客観性、明確な懐疑の表現となるであろうから。それは姿勢の変化を意味せず、内的な試みを人目に公然と示し、秘められた独白を公表することなのである。<sup>(三三)</sup>

時にヴァレリーは、まるで絵に描いたような逆説ではないか、といって非難された。しかも、まさに彼をジッドに結びつけていた絆がそのパラドックスを一層人を喰ったものに見せたのであった。つまり、文学を否定するためにあれほど厳密に細心の注意を払った人間が、結局のところ、出版の諸々のルールとか、ジャーナリズムの移り気な思いつきとか、サロン、アカデミー、名譽などの誘惑とかに服従した典型的文壇人として行動したのではないか。それに対してジッドは、作家として生涯を送ることを一度も隠そうとはしなかったが、ヴァレリーよりはるかに立派に《文学的栄光》などというこの見せかけの一切から遠くはなれて身を持っていた。

もちろん、ヴァレリーが文学の円戯場に——彼はこれをサーカスとよんだことだろう——登場しなかったとすれば、彼の主な思想は遺作として伝わったかもしれない。<sup>(三四)</sup>そして注解者の仕事はさらに難しいものになったであろう。しかし、ヴァレリーがこうして晩年に譲歩したことは、彼の原則を弱めはしなかった。ただ、あのように数多く示された論証に一つでしか可能でないこと、この細胞が蜂の巣の一部をなす場合には、遅かれ早かれコミュニケーションは避けがたいこと。ヴァレリーは、まず共同体の他のメンバー——ジッドがその筆頭である——に強く勧誘された。友人たちは、掘り出し物を、獲物を公開し、読者にお裾分けしてくれと懇願したのである。やすやすと言いなりになったではないか、と思う人もあるだろう。ヴァレリー自身、よろこんでそう認めるであろう。出版公開を唾棄する気持は、証明し認めさせたいという気持と釣合いを保っていた（ジッドと異なり、ヴァレリーは人に認めてもらい賛同を得ることは一度も求めなかった）。それとは別の、知的度合のぐっと低い考えも、ヴァレリーに作家としてのチャンスを試したいという気持を起こさせるように働いた。ヴァレリーには養わなければならない家族があった。作家として成功することを蔑視する態度は、ポール・レオトーのような独身者の場合の方が、結婚し三児をかかえた男の場合よりもよくわかる。ジッドは文学上の榮譽に無関

心であったが、もし生活するために働くことを余儀なくされていたら、おそらくそれほど超然としてはいられなかっただろう。とはいえ、ヴァレリーが独身であったら、多くの聴衆をもつ大家になる誘惑に最後まで譲らなかつたとは言えまい。彼は最上の切り札を何枚も手にしていたのだ。蓄積した考察が、十分に捲かれきつてまさに弾けようとする発条のように作用していたのだから。ポードレルルではないが、ヴァレリーも「成熟した男にとっては、集中して生産したいという気持が、破壊趣味にとってかわるべきだ」と考えていたのではあるまいか。他の人々を一撃のもとにたたきのめすことのできたあの皮肉の力をもって——優しい気持からヴァレリーはめつたにそれを行使しなかつたが——、彼は、文学的成功というものが、まさにそれを軽蔑することを説いた男に、しかも他の人々よりも一段と目立つやり方で、つまり——これもまた異常な話だが——沈黙によって説いたが故に与えられるという事実を、なかなか魅力があり教えるところ多い、と考えたに違いない。ヴァレリーが一度他の同業者たちと同じように自己表現することを選んだ以上、ゲームのルールをなんとか免れようとはせず、むしろ逆に、自分の気質のすべての可能性を動員してそれに専念するのは当然のことになった。これで、無名から高名へ、この上なく秘められた隠遁の生活からこの上なく公の生活へと突然移つたことの説明がつく。ヴァレリーは勝負強かつたのである。彼は他の人々に対する礼儀からまた自分自身の楽しみから真剣に勝負をした。肝腎な点は、彼が一試合しているのだということを決して忘れなかつたところにある。ヴァレリーは、自分自身は決してごまかされることなくゲームをしたが、遊びというのでは自分の理想が満たされない人々をごまかさないうに足るだけの熱意をもって勝負をした。このようにして彼は、自分の使命の名誉を救い、コレージュ・ド・フランスで詩学を講ずることができたのだ。あれほどまでに教授職を信用せず、詩の授業などはなおのこと信用していなかつたヴァレリーであるが。

いずれにしても、一八九二年に文学を放棄したのは、ヴァレリーの内的な欲求の最も誠実なものに応える行為であった。彼は作中人物に自分の運命の主だった特徴を型どらせる。一八九五年、九六年に、なお、『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法序説』と『テスト氏との夕べ』とを刊行するが、それはもはや他の人々と接触するためではなく、自分自身との関係をよりよく結ぶためであった。彼は自分の考えを——他の人々が終止符を打つように——整理し、丸を打つたのである。その頃、ジッドは逆に文学上の成長の危機の真直中にあり、いくつかの作品の執筆に専念しており、それが説得力を持つことを願っていた。『沼地』、『ユリヤンの旅』、『地の糧』がそれである。ジッドは聴衆を求めていた。この『書簡集』に冒頭から表われる知的な次元での方向の相違に加えて、二人の感情の上での開きがある。どちらも非常に苦悩の多いもの

であるが、その原因は非常に違ふのだ。ジッドの友情は男らしさの極めて少ない意気消沈におちいりやすく、時に恋に悩む女の手紙を読むような印象を与える。「友情も女性に対する恋情もぼくにとつては同じなのです」と書く。あるいはまた、「ぼくは夜も眠れませんでした。こういう仕打ちには、まるで愛する女性にされたかのように、ぼくを苦しめるのです。」とも言う。そしてしまいに女性に向つてものを言う男の調子になる。「ぼくの後宮には、貴君のための全く他に類をみない奥深い閨房が用意してあります。——それは空色の室、温室のガラスでぐるりと閉ざされているようです」と。このような誇張された表現がヴァレリーを驚かしたようには思われぬ。ヴァレリーは大いに優しさをこめて、しかし曖昧なところは少しもなく、動揺したと思われそうな色も全く示さず答える。ヴァレリーの優しさは詩の水位のものである。ジッドのそれはすでに肉体にかかわるものだが、彼はまたそれを意識していない。従つて全くフェアな態度で次のように書きえたのだ。「愛情関係において相手が隠しごとをしようと、それが何であれ、ぼくは苦しくなるのです。こちらは何一つ隠すことを知らないのですから。」その日まで、ジッドはヴァレリーに隠すことは何もなかった。彼の性的特異性はまだ彼にとつて露わになつてはいなかつた。ジッドは当時密かに従姉のマドレーヌ・ロンドーと婚約しており、『アンドレ・ヴァルテールの手記』及び『詩』において、エマニュエルの名のもとに理想化していた。しかし、アンドレ・ジッドがマドレーヌに宛てて書いた手紙の内容を知ることができない。なぜなら、四年後にジッドの妻となつたマドレーヌは、ある悲嘆の日、彼女の寛大さをもつても復讐というよりも絶望の行爲というべき行動を避けなかつた日に、何百通ものその書簡を火に投じてしまふだらうから。したがつて、ジッドが彼女にどのような調子で語つていたか、徹頭徹尾愛のみからなる感情、ジッドが絶対の「愛」と呼ぶ感情がどのように表現されていたかを知ることが、永久にできない。しかし、ジッド自身の打ちあけたところから推察すると、そこに彼自身の最上のものを注いだにせよ、彼は親密な男友だちに話しかける時以上に官能的な表現を用ひはしなかつたように思われる。

同様に愛情面で熱に浮かされた状態にとりつかれていたヴァレリーは、次のような表白をどのように受けとつたであろうか。「無沙汰をお許し下さい。愛情をこめてお詫びします。〔……〕ぼくは再び貴君の優しい愛情を求めてそれを得たいという欲望にしがみついたので。〔……〕再び会うのが恐ろしいくらいです。遠くにあつてこそ、知的な婚姻も神秘的・精神的なものになりやすかつた……とお互いに感じるのではなからうかと、それが心配なのです。」ヴァレリーはそれに調子を合わせるが、心をつく思い出を喚起しようとしているもののその音色ははるかに明るく軽やかだ。「待つていま



す。親しい高貴な友よ、貴兄を待ちかねて、いやいや、この待ち遠しさは断じて貴兄の思いも及ばぬものです。「……」古の薔薇の花と首をたれた百合とを目覚めさせるために、かつての天使のようにかやつてきて下さい。庭々では花冠の薔薇色の目覚めをその一息で引き起こし、あれはエデンの園でのことだったか、その手の合図によって蒼白い香りと定かならぬ木の葉とを従わせもしたのであるう、あの華奢で恐ろしいかつての天使のように。」ジッドの神秘主義は、容易に両性具有の天使を生み出すが、ヴァレリーの想像する天使は、右の文章でもわかるように、不安をかきおこすというよりは文学的なものだろう。これは教義でいう本物の天使、つまりセックスがないのである。(ここで注目すべきことは、ジッドが既にはっきりと定義された気質に加えて、自分の同性愛を知らずにいたことから、当時、性に関する慣習的な考えに従って、自分の心を惹く男たちを女性の魅力で飾っていたことである。後になると、女性に対して、ジッドは逆のことをするだろう。)

二人の青年が君僕の親しい調子を使い始める過程にも、二人の気持がよく表われている。最初に使うのはジッドであるが、いわば女性のようにおどおどしながらで——それが見せかけの小心なかどうかか疑問だが——、ついうっかりと言った調子で再び丁寧な言葉づかいにもどり、貴君と呼んで距離を置いた文章と君とってはほとんど挑発的になる文章とを巧みにまぜあわせたりするのである。ヴァレリーは君僕の調子をあいまいなところも面映ゆいところもなく単純率直に用いる。手紙を交す二人の親密さは増していく。最初に恋愛のことにふれるのはヴァレリーで、友人ジッドに次のように打ちあける。「嗚呼！ 貴兄はドレスが何物であるか、御存知でしょうか——肉欲という単純きわまりないものを一切除外しても——というよりまさに一切除外した上で。そう、ドレスのみ、そして目。」それに対してジッドは次のように解説を加えて、心ならずもそれを惜しむ心の動きを示す。「ああ！ 純粹精神よ！ ところが貴君の心もまた新たな優しき想いを歌ったのですね。貴君を責めているなどと考えないで下さい。」そして本心を見破られることを恐れるかのようになり、すぐに続けて「ぼくはエマニュエルの他には知りません。しかし、ぼくの心も精神も魂も彼女によって永遠に香を炷きこめられたのです。この世で軽蔑すべきものは虚偽だけです。……」また、何回にもわたって、辛うじて保っている肉体の純潔についてほめかす。

エマニュエルとの婚約が正式なものになった時、自分の気持が他人にもあるいは自分にもそう思わせておきたいほど単純なものではないことをジッドは示す。「ところが、ある事が少しぼくを悲しませ脅やかしています。偶然の一致から、